

ハーモニーに
遊びを乗せて

純粹に 歌声を合わせる楽しさ 楽友会

来年は創部70周年。
時代は変わり、
音楽のスタイルは変わっても
歌いたいという気持ちは同じ。



右/部員の吉武尚人君。毎年3月の定期演奏会で練習の成果を出し切って歌う喜びは、楽友会に入ってよかったと心から感じる。左/根垣俊宏部長。音楽を楽しむことが目的の部なので、先生から技術的な指導はしない。最近の部員たちは真面目で手はかからない子が多いものの、もう少し元気がほしいという思いも。



日吉祭 2016 恒例のアカベラ コーラスは大盛況!

昨年10月の日吉祭で、楽友会のブースを訪ねた。写真は男声合唱の発表の様子だが、むしろ日吉祭でのメインはJ-POPの楽曲を中心としたアカベラグループの発表。男子グループ、女子グループ、男女グループなど、様々な組み合わせの約15グループの歌声がポップに弾けた。



楽 友会は塾高創立とともに
発足した伝統あるクラブ。
1948年、岡田忠彦先生を会
長とする「慶應義塾高等学校音
楽愛好会」として始まり、50年
の女子高等学校設立とともに女
子高生を交えて混声合唱を行う
ようになった。52年には卒業生
が大学でも合唱を続けることを
決め、高校から大学まで続く「慶
應義塾楽友会」が誕生した。つ
まり大学よりも高校のクラブが
先にあつたという慶應義塾のク
ラブ活動の中でも珍しい例なの

だ。
いわゆる「合唱団」として歴
史を重ねた楽友会だが、歌は世
につれ世は歌につれ、時代とと
もにその姿は変わった。近年は
少人数でポップス系の曲を歌う、
いわゆる「アカベラコーラス・グ
ループ」スタイルでの活動の比重
が大きくなってきている。岡田
先生の後を引き継ぎ、90年から
部長を務める根垣俊宏先生はそ
の変化を見守ってきた。
「もちろん真面目な合唱もやって
いますが、10年ぐらい前からア

カベラグループの活動が増えて
きて、今は半々ぐらいでやってい
ます」(根垣部長)
今は日吉祭ではアカベラが中
心、毎年3月の定期演奏会では
合唱を中心に行っている。合唱
団というとコンクールのイメージ
が強いが、楽友会はコンクールに
は参加していない。
「20、30年ぐらい前に、コンクー
ルに出たいという意識を持った
代もあつたんですが、やはりこの
会の目的は違うということにな
りました。定期演奏会での発表
が最大の目標ということになり
ます」(根垣部長)

コンクールなどで成績を残す
ことよりも、純粹に音楽を友と
楽しむことが楽友会の精神。た
だ気になるのは部員の減少だ。
部員の吉武尚人君もその点は危
機感を抱いている。

「やはり合唱は人数が多いに越し
たことはありませんし、女子高
は毎年10人ぐらい新入生が入る
ので、混声合唱をする場合の男
女比の問題もあります。男子が
少なく感じるようになって新入
生歓迎会とか体験入部とか勧誘
にも力を入れるようにはしてい
るんですけども、今年も新入
部員は3人だけだったので、や
はり厳しいです。現状が女子に
比べて男子が少ないのも、入り

にくい要因になつてくるのかなとは
思いますね」(吉武君)

大学には男声合唱のワグネル
と混声合唱の楽友会があるが、
高校のワグネルはオーケストラ
のみで、合唱をやっているのは楽
友会だけなのだ。

「楽高は軽音部もないので、歌を
歌う部活は完全に楽友会しかあ
りません。とにかく歌いたいとい
う目的で入ってくる人も少なく
ないとは思っています。僕自身が
そういう目的で入つたので。新
入生歓迎会で楽友会がアカベラ
をやっているのを見て、元から興
味もあつたので入部を決めまし
た」(吉武君)

「今年も部員が9人しかなくて、
それぐらいの人数だと家族的に
なりますね。私も合宿なんかで
一緒にいるともう生徒たちと家
族みたいな感じで。本当に音楽
が好きなたちが集まっています、
私も音楽が好きでやっています
から気持ちよく分かります。
真面目に練習してやっていますか
ら、コンクールに行くような上
手さはないかもしれないけど、
歌っている本人たちが満足して
演奏会をやっているのは、聴く
人たちにも高校生らしさとして
伝わると思います」(根垣部長)
歌う楽しさと声を合わせる喜
びを多くの人に知ってほしい。